日 本 臨 床 教 育 学 会
第13回 研 究 大 会 開 催 要 項
（ 第 1 次 案 内 ）

1．大会日程

❋理事会：２０２３年１０月２７日（金）１５：００～１７：００

❋１日目：２０２３年１０月２８日（土）　９：３０～１７：２０

9:30　10:00　12:00　13:00　15:00　15:20　17:20

受付	自由研究発表（A） 一般研究	休憩	課題研究 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	休憩	全体講演

シンポジウム Iの終了後、近隣の会場に移動し情報交換会を行います。

❋２日目：２０２３年１０月２９日（日）　９：００～１５：３０

9:00　9:20　10:30　10:50　12:50　13:50　15:50

受付	総会	休憩	シンポジウム （学会企画）	休憩	自由研究発表(B) 実践事例研究

2．会場（現地参加・オンライン参加のどちらでも可能）

札幌学院大学 新札幌キャンパス
（〒004-8666　札幌市厚別区厚別中央１条５丁目 1-1）

3．開催方法

❋　現在のところ，札幌学院大学新札幌キャンパスを会場に対面での開催を基本としています。しかしながら，コロナ感染の状況も流動的であるため、ZOOM によるオンライン参加も可能な体制を取っています。

❋　参加申し込み時には，どちらかの参加方法を選択してください。決済後の参加方法（現地参加／ZOOM 参加）の変更については、**学会事務局**【crohde2011@yahoo.co.jp】に連絡してください。

＊　なお，新型コロナウイルス感染症対策等により，現地での開催が制限される状況が生じた場合には，現地参加の申し込みを ZOOM 参加に振り替えたり，ZOOM 参加から現地参加への変更をお断りしたりすることがあります。

４．大会参加費

＊　大会参加費は，下記の通りです。
一般：5,000 円　　学生・院生：2,000 円（現地参加もオンライン参加も同額です。）
＊　キャンセルされた場合の返金はいたしません。大会運営費とさせていただきます。
＊　大会には会員以外の方でも上記の参加費でご参加いただけます。

５．参加申し込みについて

＊　大会参加に関しては，事前申し込み制のみとさせていただきます。
＊　申し込み期間：２０２３年6月２６日（月）～１０月１４日（土）
＊　なお、現地参加の場合、宿泊、昼食に関しては、各自で対応をお願い致します。大学周辺には、飲食店やコンビニエンスストアがあります。
＊　大会参加の申し込みと参加費の入金は，イベント管理ツール「Peatix」にて行います。
申し込みの時に「現地参加」か「ZOOM 参加」かを選択して，チケットを購入（申込）してください。情報交換会にも参加される方は，セットとなったチケットを購入してください。
＊　「発表要旨集録」は事前申し込みのあった方のメールにデータで添付してお送りします。
＊　「Peatix」による申し込み方法は、別添資料をご参照ください。

６．自由研究発表の申し込み方法

⑴　発表申し込みの留意事項
自由研究発表は，「A.一般研究」と「B.実践事例研究」に分かれていますので，いずれかにご応募ください。同一報告をＡ・Ｂ両方で発表することはできません。

⑵　一般研究と実践事例研究の区分

Ａ：一般研究
臨床教育学の研究や実践の発展に関する一般的な学術研究を募集します。子ども理解，障がい児・者の理解・支援，教育実践，幼児教育・保育，若者自立支援，教師教育，教師の専門性，人間発達援助，教師・援助者の困難性，若手教師・援助者の自己形成，心の傷とケア，子ども・若者の身体，教育思想・教育実践史などの領域が，これまで報告されています。

Ｂ：実践事例研究

学校や福祉施設，医療・援助に携わる諸機関，NPO・NGO など，地域における一回性の教育実践や発達援助実践を，研究者と実践者が互いの立場を尊重しながら対等の関係で学びあい，新たな問いや学問研究の端緒を創発することをめざします。教育現場はもとより，心理，福祉，保育，養護，保健，療育，医療・看護，行政など，さまざまな領域の，あるいは領域を越えた発達援助実践に関わる研究を募集します。発表経験の有無は問いませんが，場合によっては，発表形式の確認をすることがあります。

※　Ａ・Ｂともに，学会事務局において，申し込まれた発表内容を考慮したうえで，大会時の問題領域を組織いたします。

⑶　発表時間

Ａ：一般研究は，発表 20 分，質疑応答５分です。ただし，共同研究で発表者が複数の場合は，発表 40 分，質疑 10 分とします。

Ｂ：実践事例研究は，１報告 60 分（概ね発表 40 分，質疑応答 20 分）となります。発表者が複数の場合でも１報告 60 分です。

⑷　発表申込及び発表要旨の作成について

＊　自由研究発表希望者（共同研究発表の場合はその代表者）は，第１次案内のメールに添付した申込書，または学会ホームページからダウンロードした申込書に必要事項を記入の上，メールに添付して期日までに学会事務局へ提出してください。

あわせて、発表要旨についても作成をお願いします（フォームは第１次案内に添付してあります）。提出先は同じく学会事務局のメールとなります。

＊　メールの宛先（学会事務局）：crohde2011@yahoo.co.jp

＊　自由研究発表申込の締め切りは，７月３０日（日）必着です。

＊　発表要旨（発表要旨集録用）の締め切りは，８月３０日（水）必着です。

＊　非会員の方で発表を検討される場合は，必ず入会申込書の提出と入会費・年会費の振り込みを完了してください。共同発表として連名される方もその対象となります。なお、年会費の扱いは「2023 年度納入分」といたします。

７．課題研究・全体講演・シンポジウム・

課題研究Ⅰ：現代の子どもと子ども理解（案）
-子ども理解の深化に向けて、子どもの生きづらさの根源を問う-
第１回　セクシュアル・マイノリティの子どもの生きづらさ

＜趣旨＞

これまで本課題研究では、乳幼児期に焦点を当て、臨床教育学的な子ども理解と援助者のありようについて検討を重ねてきた。その蓄積を踏まえ今回から、「子ども理解の深化に向けて、子どもの生きづらさの根源を問う」というテーマを掲げ、検討を進めていきたい。

保育や教育の場において、さまざまな「問題」が山積している。それに対し、表面的な理解や原因論があてはめられ、親、本人の問題に還元されていくことが多い。今、改めて子ども観や人権意識、学校や保育現場の認識が問われている。ここでは不登校や障害児教育、ジェンダーなど、子どもをめぐる課題を深く検討することを通して、子どもの生きづらさをもたらす共通の根源を見出し、今後の展望を共有していければと考えている。

親や本人に還元できない問題の一つに、性的マイノリティの子どもの生きづらさがある。性的マイノリティの子どもたちは、心と身体の性別が一致しているシスジェンダーかつ異性愛である人々だけを前提にした教育や文化で成立している学校の日常生活そのものに苦しめられている。「男女に分かれて」と呼びかけ、「思春期になると異性に関心が芽生える」と学習指導要領「保健」に明記していることが象徴するような学校教育の生徒指導、カリキュラムは、心と身体の性別が一致しない子どもや、非異性愛者の子どもに、「あなたは間違っている」というメッセージを与え、自己肯定感を剥奪してしまう。

性的マイノリティの子どもたちの生きづらさは何によって、どのようにもたらされているのか。学校教育に何が問われているのか。性的マイノリティの子どもたちだけでなく、すべての子どもが性の多様性を理解し、性的アイデンティティを自由に形成していける教育のありかたを考える。

報告１　　性の多様性の尊重における学校教育の現状と課題

片岡 洋子(千葉大学名誉教授)

報告２　　多様な性を生きる子どもたちのリアル

国見 亮祐（にじいろほっかいどう理事長・公立学校教員）

司会：筒井 潤子（都留文科大学）
　　影浦 紀子（愛媛東雲大学）

課題研究Ⅱ：子ども・若者の育ちや自立を支える地域からの共同
社会的包摂を意識した中学生支援の試み
ー別室登校とデイサービスでの実践ー

＜趣旨＞

昨年の第１２回研究大会では、「高校生の居場所を学校と地域でつくる試み＜居場所カフェ＞から、子ども・若者の育ちを支える共同を考える」というテーマで高校生の支援を中心に検討を行ったが、本大会では、別室登校に焦点を当て、時期は義務教育段階の中学生にしたい。

不登校の児童生徒の増加は、深刻な状況にあり、特に中学生は、２０２１（令和３）年度の不登校生徒数が１６万３４４２人となっている。そのような中、不登校の周辺に、別室登校の生徒が相当数いることがわかってきた。

文部科学省が今年３月３１日に発表した「誰一人取り残さない学びの保障に向けた不登校対策について（COCOLO プラン）」の中でも「校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム）」とネーミングされた別室登校への対策が位置づけられた。

池田考司と間宮正幸が今年２～３月に行った札幌市内１７校の中学校調査では、不登校生徒数の半数近い数の別室登校生徒がおり、多くの学校で、社会的包摂の観点から別室登校を重視した取り組みが行われていること、社会福祉法人や若者支援センター等外部機関との連携が試みられていることが明らかになった。

本課題研究では、上記の中学校調査を行った研究者、不登校・別室登校について社会的包摂の観点から実践を行っている中学校校長、中学校と連携して中学生をデイサービスの場で発達支援している社会福祉法人のスタッフに報告してもらい、中学生に対する支援の方向について検討を行いたい。

報告候補者

池田 考司（北海道教育大学）
岡田 直也（札幌市立篠路中学校校長）
未確定（社会福祉法人麦の子）

司会：富田 充保（相模女子大学）
　　伊田 勝憲（立命館大学）

課題研究Ⅲ：発達援助専門職の専門性の再検討
発達援助専門職の専門性を再考する（1）
ー日常の問題意識と協同的な学びー

＜趣旨＞

これまで、課題研究Ⅲにおいては発達援助専門職あるいは人間の発達そのものに注目しながら、それらに携わる実践者や研究者とともに発達援助の可能性を探る学びあいを重ねてきました。「人間発達援助」という概念は多様な意味を含んでおります。一つの分野において、そこでの問題意識に端を発し、問題・課題を深掘りすることも必要なことではありますが、多職種連携や世代間交流、または領域を越えた学際的研究においては、多様な立場からの知見・発想に触れ、その視野を拡げることも必要となります。発達援助専門職は、多様な立場から自らの問題意識を見つめることにより、目の前の当事者理解を深め、真相に近づくということがあります。昨年度の課題研究では「北大ワロン研究会」が蓄積してきた発達援助専門職の協同的な学びに注目しました。そこでは、まさに発達援助専門職の協同的な学びあいを実現しており、このような場の重要性を提示していただきました。

今回の報告の一つは、昨年の流れを汲みながら、発達援助専門職の協同的な学びの一例として武庫川臨床教育学会における自主ゼミの活動に注目いたします。それぞれの立場にある者が、じっくりと考えあい、互いの思いや意見を交わすなかで、それぞれの問題意識が有機的に働きあうことは、多職種連携や多世代共同の土台となるのではないでしょうか。こうした学びあいに、学会として学ばねばならないとも思います。自主ゼミに参加する人々がゆるやかに形づくってきた学びあいの場において、「じっくりと考える（熟考する）」ことの意味、継続されるゼミナール的学習の意義について語りあいます。

もう一つの報告では、近年注目されている日本における外国籍の子どもへの教育活動に焦点を当てます。外国籍の子どもは義務教育の対象外となっており、国際人権規約によって就学機会が確保されているものの、言語の違いや進学・就職指導などの面において厳しい現実があります。グローバル化や多様性が叫ばれるなか、国内における外国籍の子ども・若者が直面する問題は、これからの日本教育の課題を先取りしています。そこで、かれらの生き方の問いに向き合う現場からの報告をしていただきます。

報告１「自主ゼミでの読書会を中心とした人間発達援助の協同的探究（仮）」

武庫川臨床教育学会「自主ゼミ」関係者数名

報告２「ブラジル人学校に通う子ども・若者が抱く生き方への問い（仮）」

川瀬 弘樹（学校法人 HIRO 学園）

司会：吉益 敏文（豊岡短期大学）
　　渡邉 由之（東大阪大学）

課題研究Ⅳ：教師の専門性の再検討
ー子どもに根ざす、地域に根ざす教師と学校ー

昨年度の研究大会では、子どもの生活現実から教育を捉え直すこと、及びそこで直面した子どもの事実や実践の振り返りから立ち上がってくる研究意欲を職場で共有し、学び合うという研修の重要性について検討した。報告の中では、コロナ禍をテーマにして、主体的で創造的な授業実践を子どもの姿から創りあげる実践者の豊かな専門力量と、校内研修で「子どもの言葉から、子どもが抱えている背景を考え、それを文学の授業で勝負し、子どもを変える…そのために教材研究を重ねる…教師として原点にもどったような気持ち」になったという研修内容に注目した。

本年度は、「教師の専門性の再検討」というテーマで、養護教諭の視点から「子どもに根ざす教師」、学校長の視点から「地域に根ざす学校」という二つの角度から報告を受けて検討し、掘り下げていきたい。研究大会開催地北海道からの二つの報告とそれへのコメント受けて、子ども理解を深め伴走する教師の専門性、地域に根ざす学校づくりのための教師の専門性などについて検討していく。コロナ禍における子どもや学校の状況も踏まえて、活発な討論が展開されることを期待している。

報告１「保健室から創る希望―子どもに伴走する支援と学校教育―」

本間 康子（北海道 札幌琴似工業高等学校）

報告２「地域に根ざす学校づくりと教師の専門性」

中山 晴生（北海道 江差北小学校）

コメンテーター：福井 雅英（滋賀県立大学）

司会：春日井 敏之（立命館大学）
佐藤 隆（都留文科大学）

❋　全体講演（1 日目：15：20～17：20）

ポーランドからみる、ウクライナ侵攻

＜趣旨＞

ロシアによる軍事侵攻を受けるウクライナの人口支援に携わり、隣国ポーランドに避難する難民支援にも関わる丸山美和さんは、戦争という非人道的な被害の実相を当事者の視点から追い続けてきました。これまでインタビューをした数多くの人々の声をもとに、その声が訴えかけるものを考えあえればと思います。ロシアによるウクライナ侵攻が私たちに突きつけることは非常に重たいものです。生きること、暮らすこと、未来を見据えること、苦難のなか助け合うこと、家族を悼むこと、他者を慮ること・・・発達援助における多くの命題が突き付けられるなか、それでも人間的関心を向け続けることを願って、皆さんと考えあえればと思います。

なお、当日はインタビューの方法論についても、臨床教育学の Narrative based approach と重ねながら語っていただきます。

講師：丸山 美和
（ルポライター、ポーランド国立ヤギェロン大学非常勤講師、クラクフ在住）

❋　シンポジウム（2 日目：１０：５０～１２：５０）

臨床教育学設立 12 年記念出版企画の協働デザイン
－研究推進と多世代協働の語り合いを通して－

＜趣旨＞

日本臨床教育学会が設立して 12 年が経過する。理事会及び機関誌特別号編集準備会が中心となって進めている記念出版企画の柱と編集・出版に向けた工程案について、会員と対話しながら考え合う機会にしたい。

報告者：日本臨床教育学会理事会より数名

【第 13 回研究大会に関する問い合わせ】

〒577-8567　東大阪市西堤学園町 3-1-1
東大阪大学　渡邉由之研究室
日本臨床教育学会事務局
E-mail：crohde2011@yahoo.co.jp